

---

**勇者は、魔獣となって召喚されました。**

鬼狐

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

勇者は、魔獣となって召喚されました。

### 【Nコード】

N0834S

### 【作者名】

鬼狐

### 【あらすじ】

私、沢田優華は異世界に召喚されました。まあ、それは分かったとして、なんで魔獣になってんの？私。召喚された主人公が魔獣になって召喚された、という物語です。

## 第1話 「お、落ち着いてください！ 勇者様」

『異世界トリップ』

よくある話である。ある異世界に突然召喚された主人公は、魔王を倒すべく旅に出て、色々な仲間たちを増やし、数々の魔物を倒していき、そしてラスボスともいえる魔王をも倒す。その後、主人公は、仲間の少女と恋におち、結婚して平和に暮らした。

または、ある国のお姫様と結婚して平和に暮らしました。とか、そんな普通の王道ならどれほどよかっただろうか。だけど、これだけは覚えておいてほしい。

『それが異世界であつても、そんなにうまくいくことはない』ということを。

「あのさ…」

私は、そう呟くように言うと、目の前の冷や汗をだらだらとかいている数人の神官っぽい人たちや騎士っぽい人たちを睨む。

「これは……どういふことなのよおお!!」

数本の太い柱に支えられていると思われる白い石造りの神殿に魔獣の怒りの（少し困惑の）咆哮が木霊する。

数人の神官つばい人たちは、両耳を両手で塞ぐ。小さく悲鳴を上げたものまでいた。

「お、落ち着いてください！ 勇者様」

騎士Aは、目の前の魔獣にそう言った。（叫んだとも言える）

むう、あんまりその呼び名はいやだなあ。

そう、私自身がこの魔獣なのだ。

ここまでの経緯をじっくり教えよう。こういう時こそクールにね！

私、沢田<sup>さわだ</sup>優華<sup>ゆうか</sup>は、高校から愉快的仲間たち（ただの友達です）と共に下校中だった。そんな時、地面が突然光りだし、私の意識が完全にとんだ。

目が覚めたら、数本の太い柱に支えられていると思われる白い石造りの神殿にいて、数人の神官つばい人たちや騎士つばい人たちが驚きの表情をしていた。

なにか、お互いの頬を引っ張ったり、顔を見合わせたり、こそこそと何かを話している。

とりあえず体を起こそうとしたら、体の妙な違和感に気がついた。視線を下に下げれば、純白で暖かそうな毛皮に包まれおり、指先には真っ黒な光沢を放つ太くて鋭い爪をもった獣のような両前足が見えた。

「……？」

後ろを振り向けば、先ほどみた両前足と同じ純白の毛皮に包まれた背中と、その後ろで揺れる純白な他の部位よりもさらにフサフサとした毛に覆われている立派な尻尾が見えた。

「はあ？！」

右手を上げれば右前足が上がり、左手を少し右に動かすと左前足が右に動いた。

そして、なにより象よりも軽く超える大きさ。

「はああああ？！ なんじゃこりや あああああああああああああああああああああ？！？」

どうやら、人間だった私は、何故か魔獣として召喚されたそうです。

どうすんべ？　これ。

**第2話 「何の目的で私が召喚されたの？」（前書き）**

編集しました。

色々お手数かけます。

## 第2話 「何の目的で私が召喚されたの？」

「とりあえず、何でもこうなっただか教えてくれない？」

あの後、神官や騎士（本物だった）に少しは落ち着いた。

とりあえず、微笑みながら彼らに尋ねた。この顔（獣だからね）で微笑むと周りからどう見えるんだろうか？

「それなら俺が話そう」

その男性の声が聞こえたと思ったら、人垣がモーゼのみたいに割れていく。うわ、本物初めて見た。

モーゼみたいに割れる人垣に、ちょっと感動しながらその人垣の真ん中を通ってくる人物を凝視した。

彼の容姿が完全に見えたときには、私は固まってしまった。文字通り。

彼の髪の色は、綺麗に輝く金色のような色。

顔立ちは凜ッとしていて、まるでどこかの王子様みたいだ。

彼の装備は、周りの騎士に比べたら軽装備の藍色つばい鎧で腰のベルトには剣が付いている。それと、マントを羽織っている。

そして、彼の瞳の色は、まるで夕日のような橙色だ。うわ、見とれてしまう。

「俺の名は、アクリス・ドウ・オールデイルだ。この国の第2王子だ」

彼がそう名乗った。

……んん？ 本物の王子様？！ マジですか？

「その前に、名を覚えてくれないか？」

「あ、えーっと、沢田優華？」

私はまだ少しパニックになっているようだ。彼に聞いてどうする、私。

「ユーカが、良い名だな」

アクリスが微笑みながら言う。  
カアアと私は赤面する。やばい、このままじゃあ私が壊れてしま  
う。

「どうした？」

アクリスが、私の異変に気づいたようだ。うう、アクリスの顔が  
直視できないよお。

「べ、別になんでもない」

私は、アクリスから目を逸らしながらそう答えた。

「…そうか。それならいいんだ」

アクリスが、再び微笑んだ。くう、私がいつまで耐えきれるかど  
うか。おそらく、もうそろそろアウトだろう。

「……出来る限りのことを話すぞ？」

私は、彼の言葉にコクン、と頷いた。

彼の話では、私がここに召喚される一瞬の間に『誰か』に邪魔をされ、私がこんな姿になっただけらしい。

「多分な。だが、今のところはわからない。もう少し調べなければな」

ま、ガンバ！、と心の中で応援しておこう。

「あ、それと、何の目的で私が召喚されたの？」

やっぱり、王道の魔王の討伐？ でも、旅とか嫌だなー、面倒だし。

「心配はない。魔王はまだ復活していないからな」

あれ？ 声出てた？

「まあ、旅に出ることもほとんどない」

うーん。魔王が完全な復活してから召喚して欲しかったなあ。

「まあ、なんだ。場所を移そう」というアクリスの言葉でここから出ることにしたのだが。

「…どうすんべ?」

「口調変わってるぞ……」

しかし、私は神殿から出ることはできないのだ。  
その理由が……。

「お前、もっと小さくなれないのか?」

「むちゃ言っな!」

それは、魔獣の私のこの巨体である。  
この神殿の出入口の大きさは、大人の象一頭分ぐらいしかない。  
私は、その以上あるのだ。  
なんだよお、小さき乙女がこんな巨大狼に……。

「……もう、壊していいかな?」

「やめろお！」

「冗談だよ、冗談」

でも、どうしようか？

小さくなるなんて、そんな機能ないし……。

そんなことを考えていると体に異変がおこった。

「うへえ……！？」

体の変化に驚いた私は、変な声をあげてしまった。コンチキシヨウ、お嫁にいけないではないか。

体の変化が終わった時には、私は大型犬くらいの大きさになっていた。

「……なんか、小さくなっちゃった。てへっ」

「……………」

アクリスの顔を見上げながら、可愛いこぶった。

アクリスはただ無言だった。

なんか、恥ずかしい……！

神殿から出た私たちは、王城に向かうことになった。

「ねえねえ、この世界のこと教えてよ」

私は、隣に歩いているアクリスを見上げながら言った。

「…そういうば、お前は世界の知識は皆無だったな」

「えーえー、悪うございましたねー」

だって、まだこの世界に来て一時間もたっていないんだよ？

「まあ、おいおい話す」

「やんわり断られた!？」

第3話 「ねえー、アぁクうりいスう」 「五月蠅い」 「むう……………」 (前書き)

更新遅れてしまったことに深く反省しております。

そして何より短くてグダグダっぱいです。

第3話 「ねえー、アあくうりいスう〜」「五月蠅い」「むう……………」

王城に居候(？)し始めて一週間が経った。イコールこの世界に来て一週間が経った。

四足歩行にも完全に慣れた。もう二足歩行が懐かしい。

「で、なんで私、王城に居候してるんだっけ？」

ああ、そうだ。この世界では二トな私には、住むところがないから住ませてもらってるんだ。

なんだか勇者様なのに情けないなあ、私。ま、がんばれ、私。そんな私は、ただいま自室でゴロゴロしています。

「……………本当に二トじゃん、私」

思わずため息がでる。

瞬間、誰かがドアをノックした。

「失礼します」

そう言い、あの少女が部屋に入ってきた。

私がこの一週間で見慣れた人物だった。

金色の豊かな長い髪。少し濃いようなブルーの眼。胸は……………人間だった時の私よりも大きかった。ええい、コンチクショウ。

濃紺の西洋女中服——別名メイド服を着服している。

それなら、小説や漫画でよく登場するメイドなのだが、しかし彼女は違う。

さらりとした金髪の中から、同じ色の毛で覆われた一对の獣耳がぴよこんと生えている。

そしてスカートの中からふさふさとした彼女の髪の色と同じ色の尻尾が覗いている。

彼女曰く、金狼の獣人族らしい。私的には、狼というより、犬に近い感じがする。

「ユーカ様、ご支度が整いました」

目の前の彼女は、そういうとニコリとほほ笑んだ。

もう皆に“ユーカ様”と呼ばれるようになってしまった。

まあ、“優華様”より“ユーカ様”の方が親しみやすそうだ。

「本当！　ありがとうっ、カルたん♪」

“カルたん”とは、この子のあだ名（命名私）。

名前は“カルタ”としか聞いていないので、フルネームは不明である。

まあ、そんな話は置いて。

これで、やっと私の野望が叶う。今に見てなさい！　アクリス！

「フフフフフフ……」

「……ユーカ？　どうしましたか？」

不気味に笑う私を見て、オドオドし始めたカルたんが、仔犬みたく可愛かった。

撫でまわしていいですか？

何故、こうなったかは昨日に遡る――。

「ねーねー、アクリスー」

「……………」

「アクリスー、アークーリースー」

「……………」

「ねえー、アあくうりいすう」

「五月蠅い」

「むう……………」

アクリスは、机の上にある書類から目を離さずに、そう応えた。  
むう。私のことは眼中にないというわけか。仕方がない。

「ねえ！ ア・ク・リ・ス！」

必殺！ うるうるした瞳での上目遣い！！

流石にこの最終兵器には、敵わないだろう。恐れいったか！

…… 18歳の女子高生なら、こんなことしてもまだ大丈夫だよね？

アクリスは、ため息をつく、私と向き合った。

やったっ、と尻尾を振る私を見て、頭をなでる。

「……ユーカ」

「ん？」

「お前は、勇者なんだ。それも、今までとは違う。お前は今は人間じゃない……だから、それはできないんだ」

それと似たようなニュアンスの言葉を数日間に何回も聞きました。

「で、でもっ、この姿なら、町の人たちも犬と見間違えるかもしれないしっ」

その時の私は、必死だった。

こんなにも必死になったのは何年ぶりだっただろうか。

しかし、彼は首を横に振るだけ。つまり、駄目、ノー、許可できない。

私は耳を伏せ、尻尾を垂らして、その部屋から退出した。

「………はぁ」

残されたアクリスは、再びため息をついた。

「そりゃあ、この王城の庭には、出させていただきました。魔力が豊富な私によってきた妖精さんたちとも戯れましたよ。」

だがしかし！ この世界に来たというのに！ 王城から（庭はなし）出たことがないのだ！

私は引きこもりではない。一回でいいから外の町を見てみたい。あの過保護王子様をどうにかせねば。

「アクリスって、昔から過保護なのかな？」

私は、毛繕いしながら、ポツリと呟いた。

それに反応したのは、燃える炎のような綺麗な紅い髪の美しい女性だった。しかし、彼女も、メイド服を着服している。つまり、彼女もメイドである。

実は、彼女もカルたんも、私専属のメイドということで任されたらしい。

あの過保護王子様から。

「はい。アクリス様は、幼い頃から心配事が多い方でした」

そういう彼女は、にこりとほほ笑む。

実は、彼女もカルたんも、私専属のメイドということで任されたらしい。

「どうにかありませんか？ ソフィ姉」

“ソフィ姉”とは、もちろん私命名のあだ名。ソフィテールという彼女の名前からだ。

……でも、これあだ名？ という突っ込みは全面的にスルーさせていただきます。

まあ、理由は、お姉さんキャラだったからである。

……それだけ？ という突っ込みも全面的にさせていただきます。

「そうですねえ……、それでは、こういうのはいかがでしょう？」

ソフィ姉からの提案を、簡単にいえば『城下町への食料調達する時に、こっそりと抜け出す』だ。

もつと簡単にいえば『お使いついでに脱走』である。

「それでは、参りましょうか」

城の小さな裏口前にスタンバイしていたソフィ姉は、私とカルたんが来るとニコリとほほ笑んだ。

このお人は、よくほほ笑むお人だなあ。とか思いながら、尻尾を切れそうな勢いで振りながら、王城のから飛び出した私の姿がそこにはあった。

「でも、あまりはしゃぎ過ぎないようにしてくださいね」

というカルたんの忠告に「はい」と小学生のような返事をする私の姿もそこにはあった。

第3話 「ねえー、アあくうりいスう」 「五月蠅い」 「むう……………」 (後書き

何故、カルタの時のみ胸の大きさの描写があり、ソフィ姉にはなかったのか。

それは、ユーカもカルタもボロ負けだったため、彼女は触れなかっただけです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0834s/>

---

勇者は、魔獣となって召喚されました。

2011年10月7日00時37分発行